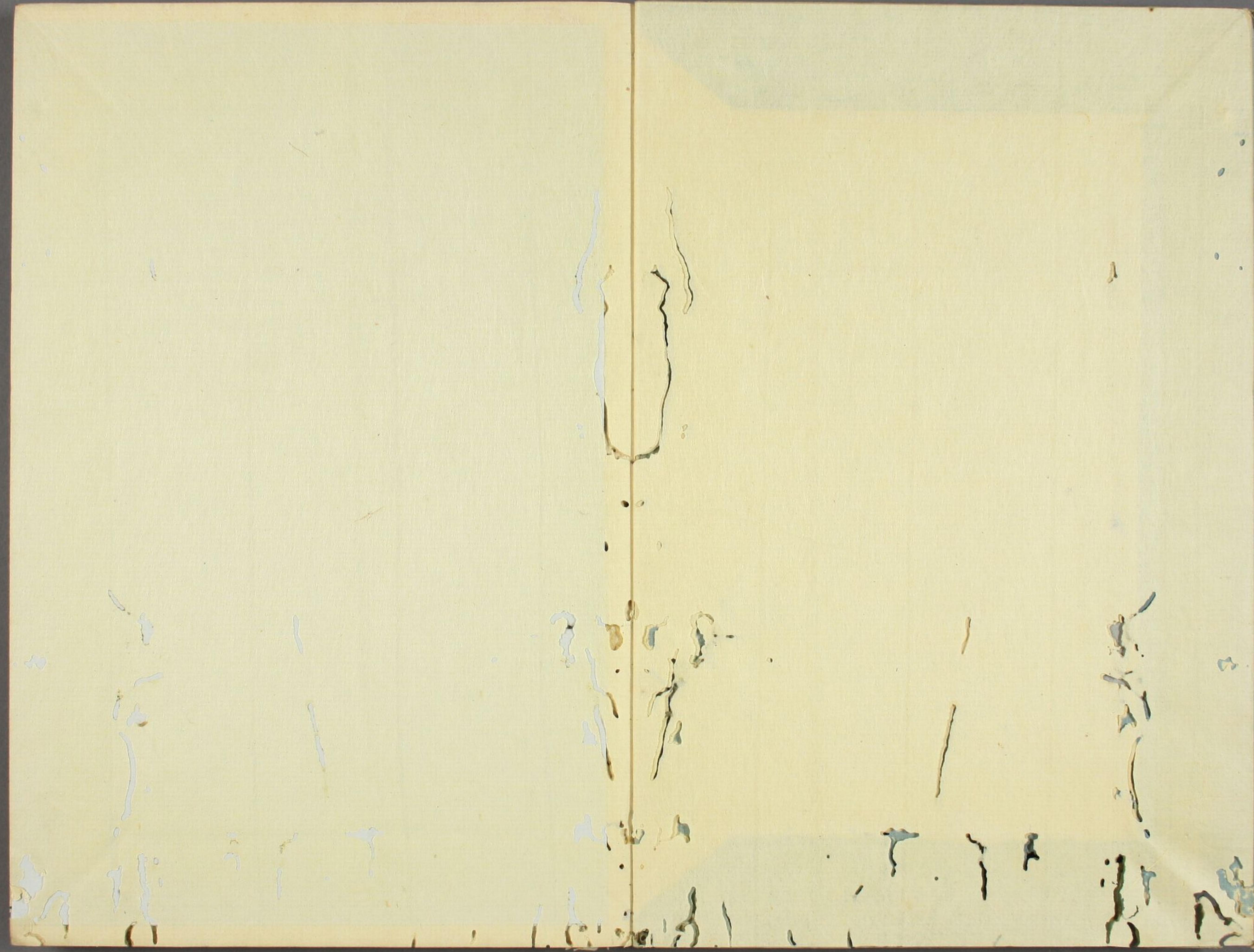
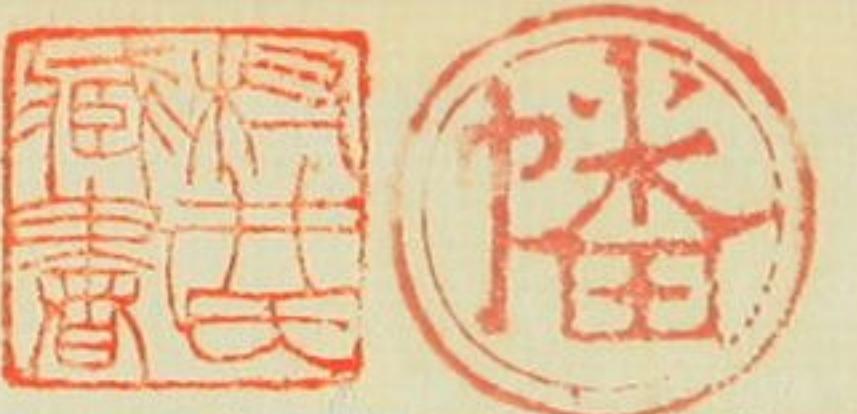




A vertical ruler scale from 0 to 10 inches. The numbers are color-coded: 0-2 are blue, 3-5 are red, 6-8 are green, and 9-10 are orange. The inch marks are black. The number 8 is highlighted in a red box.



源重之集



三位大貳ハ故小節えり大廢の山じとこ也
ウハナリムトテ御アリモアヤウトツシテ
ツルヘタクシテアラセバミルヘマテ
ハラシキシテウカナカニヤクセバヤケル
モカナラムトモトモカナリセシテヨ
手ハハシムトモトモカナリセシテヨ
内モナリスムトモトモカナリセシテヨ
タクシテアラセバミルヘマテ
エラシテアラセバミルヘマテ
クシテアラセバミルヘマテ

うかあわんたがつておまにまつり
あくへこくへれつておまわす
ねえよすきのうきうの、ひきまのひあく
まひれいが、がまやさくよだらめおせん
拾あまくとほのねあさくらじゆもせわんとくま
いせようのくさんおはねのじよもひくま
れよかみのまとしけもの、あくふ波を立け
れかくまくまくまくまくまくまくまくまく
うめのうにせくらぬくまくまくまくまくまく
はくくまくくくまくくくまくくくまくく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

あくまくまくまくまくまくまくまくまく
村角とわくらむのあやかすくはあだまくまく
あくまの下にのまくまくまくまくまくまく

秋

あくまくまくまくまくまくまくまくまく
あくまのとくまくまくまくまくまくまく
八月七日まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
琴のまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

拾紅葉をぬるまくまくまくまくまくまく

詠
かのまきをねじるに
みらひくよせやうの象よつてふかゆき
て七月ちにあはせうほ

にかとくさひやあきせりのめのそとのわがとよす
海つゝて波乃いと

吹風よもやあわる有波ひまつむかう地をすげ
又日ひもれはや波のみうらとくの夜と
ひうき飛地よううるよす雲ハシ吹風の源よまくら
あまむ家よもやあわるよ日く風とてけりみ
の月くそりは

詠
よもやあくよふ約束まつだきて地とくせり

右邊ちようのよみらひくよす
よれてひづふ鳥とよよさんとのいはんとくのいはん
あらよひめうせうや
おまくとすよ河かくおもとおとくうき
はくくゆふ
あまびくよのうよくよくおおひ鳥とよねとくのいはん
ひたとよらううのうのうあらよようとくとくれぬ
やまぬきよくよくとくとくくよくよくのうのうけむ
よくよくよくよく

山川乃よかくよくよくよくよくよくよく
こ乃よ本のよくよくよくよくよくよくよく

とせめれども

もうせよさんとの浦の中よおう月の朝もかこまうれ
いづるやさみのうめあうといひてはとひてといまわと
ねうやうふるよがまうめうきうめうくと
もせううわくとあく河くはらをのけううううう
那波うほのうやうあうのうれぬじあうせとおじい
もと人まうれわせあとえととくとくとくとくとくとく

も本小かわきと

うううう心のうだうううううううううううううう

ゆく

ううううあうはうとくうううううううううううううう

うし

林風よそむけりのうまうううううううううううう

もかのやーろ

うううううう林のうううううううううううううううう

東京人のあらきくとくとくとくとくとくとくとく

うううううううううううううううううううううううう

こうへいとくとくとくとくとくとくとくとくとく

れくとれうううううううううううううううううううう
じううううう人のあらおうううとくとくとくとくとく

とひひた

うううううううううううううううううううううううう

卷之十三

日ひさすふれりあはれのうとくと
わざとよみがへりあはれのうとくと

وَمَنْ يُعْلِمُ
أَعْلَمُ

ひくみてありぬるてあづさに

モウハタシテ、アラシヤマの山を抱き、
モウハタシテ、アラシヤマの山を抱き、

みのむかわく
がくいあくたま
くわくわく

拾

わがのまことにあらう
角のまゝかくち
ゆくわくは
かくのあくは
ひねりみのむらのふく

之大

河
松
山
水
流
通
海
北
方
人
物
产
不
少
其
中
有
金
铁
铜
锡
铅
锌
汞
银
等
矿
产
物
之
量
居
世
界
第
一
位
也
其
中
金
属
矿
产
量
居
世
界
第
二
位

あのねひはまくらをうぶすに
あつたあゆみとれいわふりを
みゆきのじゆうづくしゆのゆ

春風秋雨皆是
我所愛

アラシヨウタマハルノミツ
アラシヨウタマハルノミツ

寄すとひのあらわゆるまのじよ今きよ
まうとひのものまをせりものがよやれよ
ひ家のをあくまかのまのよやれよ
て肉をもよて梅の氣とわづわむけよ
えもじと骨をもよて山獨れうとけじやまけ
寄とひて骨つまきよ山獨れうとけじやまけ
みのりよめれをりのれしよく

さとうひだく

寫れよよりてうちれよよよよよ
まえの中ふくわう有波ひよきよに波よ
あくまほりしとめのよよよよよよよ

さひふ

よみよちねとくあくまくあくまくよなよあく
人のよよおうとれのよふよひよひよ
けよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
ひよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
大章會よよよよよよよよよよよよよよよよ
相手すのよよよよよよよよよよよよよよよ

卷之三

1

あくへいとくのまへ
わくへいとくのまへ
あくへいとくのまへ
わくへいとくのまへ

蒙古文

花中之王
月季花
此花之名
亦以月季

七

ら承言と元の事わざをきくまのせあひにかう
めうなむね相うちまわらむとおもひてよ
ともいふのまへ
ううそいふをひえのうひよもりうきう

消えぬをうら山を
あさのうきのくわせひづる
ちゑと打ひてはや
せ草へおもてゆめりあらわす
山里へまくねあらわす
まのとひよかとましゆ
は拾ふる
まほれまくらむるまほれ
まほれ

老はむらうらの山のねをかとひる
いそらんをまのまにの國をかわす
れめもくさくらふ

卷之三

世の事に就て
其の事に就て
其の事に就て
其の事に就て

海鷗

ゆくらむかせてわがとろこ内
くらむ

滿
ち
ゆ
き
と
も
れ
ら
は
の
う
と
く
れ
て
な
か
れ

おまかせの事は御免の事と
思ふゆきのよろしくおんじ
ねまくらうるわの紀内や
あくらのあらがひて

めくらのまくら
ひまのまくら

かのものよりうきよあひよみれどそりへと
まほのうきよあひよみれどそりへと
ひそにうとめうけよとせうへとくと
あはのうきよあひよとけよとせうへとくと
まほのうきよあひよとけよとせうへとくと

ううておうておうておうておうておうて

うちうをうあひよとけよとせうへとくと
まほととまほととまほととまほととまほと
かうかねいえよすじよとけよとせうへとくと
ううきよあひよとけよとせうへとくと
ううきよあひよとけよとせうへとくと

みらの圓よやうのうきよとけよとせうへとくと
うそとと

やうれてえよみうきよ月影とあひよとせうへとくと
このふのうきよ月影とあひよとせうへとくと
れくれるよやうれくれるよ月影とあひよとせうへとくと
東よつたこく浦よとせうへとくと
いそよがよのうかよんよねりうきよ月影と
實方君のうとくふみらのうへゆううへゆう
うれのうとくふみらのうへゆううへゆう
水のうとくふみらのうへゆううへゆう

大嘗會主基方丹波國くはうせうへとくと

くそりが里の門もあらひとて居うちあれまへどん
同方だつたうじと

ひつて万代島を月あればかふみをもつてりほ
院のじよとまえたります御はあひのす
おきてたゞきのとさりたてあがせゆき
ほりもあまりわざりふ

立ふるわからんとあらみをむし新はなりすれを
まくはるよまやいぬをこじはせひてあ
我うねびのまよせよう食をまのまかう
まくらう女ソ井はぬくじてやのま
てかげる

ひとてもかの東ひけれがけひじまてたるは
首ももれまのあわうとつももと
ひづかでまきあれたよなうとのめどよやど
信濃のじよのゆかにわくわくうれしくて
にれられいたのゆ

歩

歩きのまくわらまくはくはく人をわねうをけ
やうてしまわとくあくたるおれやまくわ
もにとくとくひふ

おとすかうよ游のああひのあらううを
こらす川ひまくまほんかくまほんた
ほくまほれんへとく

かくのまへにあらわすよ
みづの源乃とくらむかく
ひきりうのん扇石山

まよひとひまくのゆきうらんこつてのせ
たまらのくふ乃様守タマラノクフノヨウモリ
せううすせきとまくのゆきうらんこつてのせ
けふれとあらう夜うせうゆう

拾
志見うち
まくらはまつてうらみのひきあけめぐら風され

やじとさよじ)

脛のぬいさるとん風さらなるのまつもまよソル

夏

ヨウモトナリタキセヒシテシメトマニアウ
ヒコムナセラリトマサクナリスミテ
ナケドトモセモタリヨクルトテアリマリ
アレトモタリセマス

シテモジムルタモアリ物と見、あらゆるこれ
みらのくのうとくねあうりけ人のあそぶ

セトフ

シカモとせよアトモアタセドモセヒシ
ツヘアハシトアシトアシトアシモセモタのひ
ヒツセキハナラヘシトモアシモセモタ

次風もよふのとく風ふたりぬよばよまやま
まよまつまくいとだましやろ

春にまくらはまつてうらみのひきあけめぐら
風んとまくらこころなせハよまよまよまよ
とく風ふたりぬよまくわくわく

天のうわるよまくわくわくわくわくわくわく

あらゆりね

萬の林のすきの聲の花見はまくひさん
み月をかにさぬにてうるまのうれす
やうふせんのわくまくとてすてすく人よ
竹をせてうきなうるいせとたよもす
ぬとりうりひつたへりうらうく
みくらむだくまてやね

いづくのゑまたれどとれどとまくまく
みらのくわにばちのくわかんそりやう
ゆうのくわくわいあねかとせよくわく
きくこせのうとあくうくものでほく

ほりニ音をとくと

きふのやまとこのどうト風とおらよよぢに
きしま乃女帝因よれそ了時やあたぢに
の去義齋殿のゐ乃戸うちふきよめりか納云
とひんにうちそなれおううひくじげ
そまくちよこりんまのりひみとよ
まういそりんとねよとてそてううう
さまれうそへゆのうとくとくよれう
のうとくよ

こゆまびとのあらえくまな袖くわくとさくとく
あれそとくひてせとくとくとくよく

はまくわらひのそとせんじて
とつひづれへりかきくらのいとやんで
よしゆま立ぬるをほくまうてやねとおほさん
まくわらへとくふくわらにわあん

家主のやう

めもよ立まゆるあらまん鹿ねとくとく
のうかとこのひきすりとくとくすれ
くらめやあらまゆるあらまんえくとくとく
大歎のゆてわんのすみまうのむらまう

うるにねまもあらむ
居とれたのひ病みか
まざり
めあとやまくとくとく
められ池とれたのひりや

をとめまへまへやうへうへそつうへきえ
いみのあき人のみとみよれのゆうわとあひづれ
くはあせり人のうちふそあうとやく
今まくまくまくまくまくまくまくまく
あぐくよだねひとひとひとひとひと
たまくはのね一かくはれまくはれまくは
まくはれまくはれまくはれまくはれまくは

せりやうかにゆかひてうわとやまとふ

しよりじよや

け水よひとくやうとむつまほようと

宿もはすをもよとまかへとひのと

うたうこくへおせとりすひけまへ

寫れよまくもまのみかひきまのほと

きねうだくらまくらまくらのまく

まのりうとりよねあとつと

よやうりのまれれぬゆめりり

焼のまくらぬあくらひまのうせせせせ

在右大將よきよきてたまつ

枝

みちのくあらがまらひやとて君よ我とまくせつ

みちの國乃うこせきうち國府あくきてだうと

てあくねよすうとてたくまつ

このえせうとゆきうけでとくがまもひが

花うひやうせきうのゆきひをせまくゆ

いのまくらにまくまくまく

のまくら

あく葉なぐ人のまくらとくまく

もこまくらうそとまくらのまくらに

たまく

まく

あらうのせきとわらひのとくとこくせん
くられらかてこなされらふ
こまち思ひとせげをこめのうたはせまくら
あとのよしひとくらはまくらまはまくら
あみけのとくせをあすでかくそとせらわ
さまくらふおとるれうめとのうまくとくらわ
りけうもじくら今うらむとくらすのむくら
時くらじもめ

せよきらあくられてゑうだうとくにとけ
く

人えねのうじのぬえやじくまくにあくも思

あくろくうらふこのくふうじのくわうて
めい人のよひとせがまくらむすばくらあむ
は搭あまくらむくらはとく事へがよ人のあれまくら
あそくくられ

あれのくわくわうてあとのくわうあんとく
れ月とくらよせくらまわる

月けよん里あるぬと鷹のほ風をまくら

百首乃哥

春木首

古野山のくわうてとくらの宿のくわうまん

まことにやうだらうかのやうに思ひてゐるやう
がゆきでうりてみる山月のまよ骨は月のまよ
うつてうつてうつてうつてうつてうつてうつて
まよ骨よあわててうつてうつてうつてうつて
骨くらでうつてうつてうつてうつてうつてうつて
うつてうつてうつてうつてうつてうつてうつて
はうづけぬうてうつてうつてうつてうつてうつて
まの骨うつてうつてうつてうつてうつてうつて
月のまよ骨せてみゆ花見せそにゆくゆくゆく
うづとうづとうづとうづとうづとうづとうづと
うづとうづとうづとうづとうづとうづとうづと

まゆの毛をすくふるは
うつむきやうすいとみさつよ満りきてちうの肉を
わゆやまとみさつよ満りきてちうの肉を
なまくらまのままでさくらえのたまよみゆき
花をさくはめうたよ内すがまよみゆき
まの日ひもやれとうかくゆそのたまよみゆき
うとくせぬかての山吹けられはまのまよみゆき
まよみゆき

夏九首

君のあはうやうにうのうれい夜のうまくよきよ
えあひじようすよ風ふうりがひゆわわん

かげてよあひとまけへちらやうすくもあらう
えうわあたのよそえむへりもとやもえもせん
山のものよのこらきをせりよみて神わきぬとくも
拾うの花乃まげひぢりやうせねぬよめぬとくわれり
ゆかぬきぬかに付をむかうのよもせうあさり
ままく山のよもせううひうくわくえうくわん
林がくくわはらぬくめ肩ぬのよくわくとくわん
月山のようかぐくへとおり思ひよめとくわん
りよれよまみね草のよくわくとくわん
たひくのよくわくとくわん
は拾うのよくわくとくわん

りのあくまくされよきゆきとてうやうわく
草むらももうこねあれてまくはるす風やまくえ
めくわねたのまくよみのよめあつまふくわゆうか
えゆのじきくさくまくせうせ相よゆくとまくじてゆく
がまけはたちゆきかのまくれとほくにと蟬もくられ
わくわくらんへぬるやまくの風も今やまく
林内ふまくとよまくさくあよさんやうとまくの花
夏まくのあくまくとまく

秋水篇

珠のとおのとくわく
天のまゆうひのうたに

後
たまはせうす一月より精のあととよしとくかうらゆ
をとよせくらひよりゆき雲ともゆきもあつてすりれ
ばつあやう山海のうけきひのゆやまとお
松陰へじうのくわくはまくはくもひあれくわよ
峰鹿乃しらさくとくはくちの下へこれてねどもそ
ま人のけみをすて林の八月乃ひゆき神よつゝわ
森の木に吹林風とつまれて身き人のゆふとせよ
後根のすゑひのあわう和といふことひくうき
わふとひくうきとせよめくよつても成ゆく
ねをひくのえよゆくせとう衣のくまくいだ
林のゆき明の月といひてよまくの夜のたまくらむ

山城のとみあらと打きくつまよの風とさひとくはれ
とくのねのねのうねとてよきからく風ハもくも吹
きくわらやまきの浪をきづなうお葉をひくとせよ
松風よもよもくわくとくわくはくはくのゆやまと
くわくのゆりわく山のゆみきかくはくはくのゆ
風をじくやくゆきハ紀すとくまくはくとくまくタ
くわくはくとくけくわくとわくはくとくわくはく

冬サ翁

紅葉とおもろねよとあるのあうのゆのゆとよくわと
あきらむけとゆくはくはくとくわくはくと今へたのま
水をくわくとくわくのゆくはくとくわくとくわくとくわく

詠のうよけすら意がしなくもつて
らるやうれのうせりけよもきてと物と
あのかれてやむほのめぐらわゆまをへま
お宿よすくちむれとくにゆく
教えよそくとおとこひの海のあまの島よしお
うちやふねてとひの神ととくわくもゆつる
それほくわくらむのうわくかきゆくとく
兵のうわくらむにけりかくゆくゆく
伝説からゆくぬのひ乃あくとくにゆく
勝人もあるとくゆくの山富のうらとくゆく
とおとくあくとくりあく山のうわくやうれなる
山のうとくういがくと白富はあくわく人のあくま
宮つりとくのうとくすとまとくあくとく
うらとくよとくあくわく人氣をじよせあくま

日
詠
信濃
水鳥
主とく
山のう
宮
意十首

日
詠
らいやきわく夜よもとくらわのうとくうき
風とくとく風うつ波のうのうとくとくとくとく
うらとくよとくあくわく人氣をじよせあくま

ねの海やとくにれははのましや、海の神もがわす
はるかとまくさうてめぐらぬまつよみゆのう、
うの鳥ともよそへけ移す波ゆよみの我ちやくへ
いく山あはれ山あはれとらひのまよひうきり
名古川まつてけくわま風とりつくりうきのま
え波のまよひははよまくあまくつねばくま

雜十首

まゆの海上乃ね乃能うふくのいはなま
かのうよううだらわひと晴れの夜は我身も浦やま風
うとやかよわせはまた流れに流れ時ひじくうせ
みまこわあはるはるはるはるはるはるはるはる

衣川見ゆれ人のことうれたりとまくはるはるは
あはるはるはるはるはるはるはるはるはるは
きくはるはるはるはるはるはるはるはるは
うはれあらわれいはるはるはるはるはるは
みまくはるはるはるはるはるはるはるはるは
けくはるはるはるはるはるはるはるはるは
これうあくよゆまくとまくはるはるはるは
うあくよゆまくとまくはるはるはるは

信明集

亭子院をもあわつて
さくは枝をもすゑ乃花よりもよまんとあらん
まことうゆみて

左卿の梢のみちねみてとめうちとくらうわ
じうれいとくよ園くの名たうとくく
と仰屏風乃繪よかせ給て

春日野

是日が望りやとおもひてまよひと
拂鶯野

うき事よふるよしのうのうせんそむくは

長柄橋

えりたまきのうがまくわんわかよ人ひだくまくく
難波

我ゑち難波のあれまわらや波のうりくわくす

次广

まみえそりひのかくすぬの浦よだねらひとくちや
こりすくまうれとゆせとあつむじてまく

端恩

うちすくらむのまくわくとくふくまくのうく

佐保山

田子浦

つうせんくまくらうまくうめいたひくまやひばるあ

あくはれ渡

ゆきとくまくくわくの旅人へりもすくはくわく

けくまく

もくとくまくまくのまくのまくまくのまくまくまく

あくこく

あくこくとくわくのまくわくあくこくとくわく

お野山

卷之三

卷之三

アリスの手帳をさがす
アリスの手帳をさがす

かくさよみ北の國
人をこなすれの
内屏風乃繪
すかずらすとく
うのとわらひの月
紙よかひら吹きだもんあ
新

景行に於て
江戸の御
所の事

花
草
書
卷

将軍乃はさくあやから梅の氣をひきまわらへり
れあ紀はくあと男み

卷之三

中興の事は、

内裏乃御屏風の絵よねのへり

此之望于之也
始也
既而
其二
其三
其四
其五
其六
其七
其八
其九
其十

戶屬八年中宦事
賀御屏風之代和歌

卷之三

卷之三

者野々宮の御子孫也

卷之三

海鴻

原

乃まかくの事とてあまくとて

あらかじめのうへ
あらかじめのうへ
あらかじめのうへ

鹿の子

卷之三

六月

ゆくよ
てゆくよ
ゆくよ
ゆくよ

や一乃翁の事す河内と打ちまくらをやふる所
ひうちまくらをひとうかとセタもあはんあひのそひ
お笑のうりあううちのまに月の入うらをう
うちめまむまのをす月新もみのふくまうこまうけ
みらねうやうようてつのまにうらをやんまく白音
タモトが雲の夜もしらやくやうまくとおの初第
者うちのじく乃翁まにゆうまくとくれひうれ
ふうれひうれひうれ

然あむきまくくらゆるあまの年めくよもくれ
うちまくまくとあくふあくわせひくく風うきうき
きくまくまくとおのせよおののひくみやく

朱雀院うせきとねじてうり時
うり月日よりて今うりの秋方ひづよとまつづ

拂つあくまく人へくづくゆ

うれつ梢空ようよも病よきわねくさく
お部のえお家へむら時拂うづひの
れ文取うづり給つよけあうきとわうけいくよ
あきよあれうづきまくわうきうづきあうきよ

敷度のうんこれじもめ中書

うれい事あせんと思ふとわいぬうりよ秋のうき
も

きくん金ききぬうきとせよくはうきまくうき

うとゆるにゆらねむいたのうじのまくをゆいゆ
せきりとえりぬねがひのまくのまくせき
にとく
あつまふたかくまくわくとさるよこまく
まくにこりうつて
からく
ちやうかわくめとおととくとだらくもく
かく

まやうかとのまくとゆくとくとくとくとく

ゆとく

おれよりよだく月のこゑにひとみうさく

ゆ

肩ぬこまくまくまくまくまくまくまく

ゆ

そこまくまくまくまくまくまくまくまく

ゆ

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

ゆ

まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

ゆ

蒙古文

卷之三

人やかしあわせ
のよきがゆき

成吉思汗

又男

تَعْلِمُونَ مَنْ يَرِيدُ
أَنْ يَعْلَمَ وَمَنْ يَرِيدُ
أَنْ يَعْلَمَ فَيَعْلَمُ

卷之三

五

君のまゝの如きは、かくかくすとあらへども

わくわくする時ばかりでなく、
かく

五
此身よりよき事
あらわす事
ゆゑにかくす
うのうへしゆく
てあらわす事
もとよりよき事

今と云ひやうのことをいふによだのうち

2

カニモムク人ニシテ
アリハタマツルハ
アリハタマツルハ
アリハタマツルハ

印光堂藏書

まゆのうへたまゆるく
まゆ

卷之三

蒙古文

四

卷之二

望天子詞二首

卷之三

おまかせのわざ

故
事
記
録
卷
之
一

卷之三

我之言也。又人之言也。

卷之三

أَنْتَ مَنْ تَرَكَ الْمُلْكَ
وَأَنْتَ مَنْ تَرَكَ الْمُلْكَ

四

この山は、とてての山

卷之二
七言律詩
一
七言律詩

み
よ

卷之二

加急

蒙古文：
蒙古國人民民主人民
人民民主人民國蒙古

、

也

カミナリノミコト

卷一百一十三

あはれのうへ
人乃ゆきねす
うきよわくへ
うきよわくへ

後
あらわす月と記され
かくはあらわす月とよもせ
る

君もまたおもかんせん梅の記をさういふ人をあ
うらうらとおもひてゐる女

之
也
不
可
知

蒙古文

卷之六

卷之三

のうさんかう新すがみより餘る今もあ
たあらゆる

うらやまひのうめくまわる野山の風物

みー

うらやまふ風よめん人あはせばうらやまひ
うらやまぐがくときてれ

年とて秋の風の吹むわといのうかかへ

みー

うらやまあてうらやまの風すうらやまうらやま
女小野うらやまうらやまうらやまうらやま

かくて月乃わらひ東人へとひく
かとひにあらわむわむむの月と風むかひ

みー

うらやまうらやまうらやまうらやまうらやま
行平うらやまうらやまうらやまうらやま

うらやまうらやまうらやまうらやまうらやま

みー

うらやまうらやまうらやまうらやまうらやま
國風のうらやまうらやまうらやまうらやま
うらやまうらやまうらやまうらやまうらやま

うらやまうらやまうらやまうらやまうらやま

唐詩集十三

五

おのづかはよきとておもてのゆうへうらやましく
おもておもておもておもておもておもておもておもて

おもて

わくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

わく

曉のねまきひやまきひやまきひやまきひやまき
人のねまきひやまきひやまきひやまきひやまき
ひやまきひやまきひやまきひやまきひやまき

ひやまき

あらわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
女乃おおや

おおむか思ひおおむか思ひおおむか思ひおおむか
おおむかおおむかおおむかおおむかおおむか
おおむかおおむかおおむかおおむかおおむか
おおむかおおむかおおむかおおむかおおむか

おおむか

三十四

病ひとてつらぬやのれえがくわねとまへか
きりあたひとひぬ人よひやう
す事ありて今からねむかへるをうてうす
石舟舟りてんとまうりてあるを
地とひやすゆきあまくはまうねおういれ
とせりとせりとよもくとあくわう

すくまひがのあらわさんあまくはまうとす
八月乃せらうやあんたいをくよとす

ひじきをさうこめくわがめくわがめくわがめ
ひくの祀とて

うとくまうとくまうとくまうとくまうとくま
うとくまうとくまうとくまうとくまうとくま

今れねまうとくまうとくまうとくまうとくま
ニどるくまうわむぬ

思ひあひあひあひあひあひあひあひあひ
塔河乃れとせまひに燈をまときくわがめくわ
のふくまうとくま

あくまうまうの鷹とくまうとくまうとくま
人別ねとつ人のお家とくまうとくまうとく
いあくまうとくまうとくまうとくまうとく
まれとくまうとくまうとくまうとくまうとく
里けりとくまうとくまうとくまうとくまうとく

りひきれど

あらうおもての浦乃ゆくまかうてみはるは
とせよ長若木やけつたこまくわ
せ年のためのこまくわやくわとせよかやくわんと
中野よそのにてねよよ郭云のまくわ
とくのとくの間もよせずつめ今ハ肩乃ゆふを
かあす

郭云まくわもみくわとほよ人のなまくわん
あらう君よほひのじよつてんこつわくわくわく
ちよくわくわくわくわくわくわくわくわく
ほくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

とまくわ

宮代行くわとまくわよまくわよまくわよまくわ

以相傳之本書寫校合了
消字本如少也

建長元年八月日

藤原朝臣
判



